和訓栞の序文「栞文播旨書（しおりぶみのはしがき）＝本居宣長筆」の勉強会について

（平成17年8月3日、センターパレス２Ｆにて）　　塚澤　洋

谷川士清の「和訓栞」の「序＝栞文播旨書（しおりぶみのはしがき）」は本居宣長が書いたものです。この序を自分たちで解釈してみようと試み、勉強会の題材としました。この序の宣長自筆のものは、大正11年には、東京の三村竹清（本名清三郎[1876-1953]、津出身の江戸文化研究家）が所有していたことが、同氏から第16代川喜田久太夫宛の手紙に書かれています。しかし、同直筆の現在の所在は不明となっています。資料としては、活字本の「和訓栞」の序のコピーを使用しました。

勉強方法としては、「栞文播旨書」の言葉の一つ一つの意味を辞書「広辞苑」で引いて書き出し、そのつながりによって文章の意味を理解していこうというものです。全体に祝詞で使われるような大和言葉（日本の雅言、主に平安時代以前の語）で書かれており、枕詞などによる幾重にも連なった言葉の修飾と、それらが生み出す言葉の響きによって、文章に荘重な感じを与えています。

辞書を引いていくにつれて、「栞文播旨書」の言葉のほとんどが「広辞苑」に記載されていることが分かり、宣長は典型的な大和言葉によってこの序文を書いたことを知りました。

内容としては、まず荘重な言葉の連なりによって「天孫降臨」の有様を記述し、天孫を伊勢の地に導いた神「猿田彦」の功績を称えています。さらに、「猿田彦」の鎮座する伊勢の地から谷川士清に話を移し、絶えることなく流れる谷川の流れにたとえて、彼が日本古来の言葉を一心に研究したことを褒め称えています。

この序を読んで、特に新しい事実が分かったということはありませんが、本居宣長の文章の巧みさや、大和言葉などに対する知識の深さなどから、彼の才能を改めて知るとともに、本居宣長の和訓栞に対する評価の高さや、士清に対する友情の深さを感じることができました。

（筆者は事務局長・研究部会所属）

➢➢➢